随想三題

神戸の海

鷲尾　圭司
〈林崎漁業協同組合職員〉

所用があって県庁に出掛けたときなど、一時間でも余裕があると裏の諏訪山に登る。ひたすら登ってラセン階段のある陸橋あたりで振り返り、海を見る。

港町の魅力は遠目で見て映えるようで、キラキラ光る海面に様々な船が浮かび、泉南の山並みと淡路島の山並みが向き合う間に太平洋に続く水路がのぞく。夜ともなれば、高層ビルの増えた町並みが百万ドルの夜景を演出するだろうし、スケール大きな景観がせせこましい視界しか得られない日常から気持ちを解き放ってくれる。

こんな魅力のある神戸は、さながら街全体が今はやりのウォーターフロントとして時代の風を受けているように感じられる。

しかし、水辺に近づいてよく見るとがっかりすることもある。仕事柄、常に海の側からものを見る癖なのだろうが、地上の立派さに比べて水との接点以下の貧困さが目につく。

水際のすべてが灰色のコンクリートで覆われた、美観という観点のない機能的造作もさることながら、淀んだ水は白い布を浸けると染まりそうに見える。最近はましになったとも言われるが、手を浸けたいとも思わない。

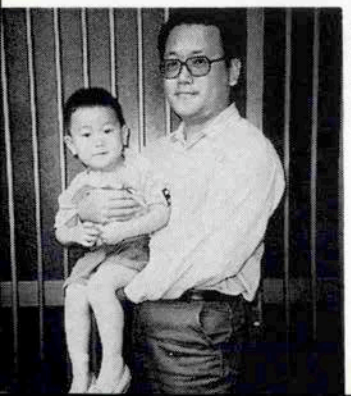
海には、流れ込んだ汚濁をきれいにする自然の浄化力がある。それは砂浜に住む微生物の働きであったり、岩場に生える海藻の働きであったりする。

海藻の生える浅い海を埋立て、防波堤で仕切ってしまうと自然の浄化力は激減してしまうえに、流れ込む汚濁は溜るばかりで、ヘドロ臭がしてくる。

この影響は防波堤の外にも及んでいる。神戸から淡路島へ船を走らせると、三種類の水の色に出会う。港を出てしばらくは、阪神間の海へのツケが海面を被い、息苦しささえ覚える。二、三キロ進むとプラスチックやビニールのゴミが集まる潮境があり、それを過ぎると水がきれいになったのが知れる。行程の中ばあたりまでの海水は、明石海峡の激しい潮流で揉まれ、舞い上がる砂で浄化されたもので、日本一の漁場を潤す命の水になっている。さらに淡路島に近づくと、ぐっと透明感に富む海水に出会う。これは、太平洋の黒潮からもたらされた汚れを知らない海水で、大阪湾の汚れを薄めてくれる。

この三つの海水の中で一番汚い水がこのところまたぞろ幅を利かせるようになってきており、これ以上、大阪湾の海水の動きを邪魔

光と影の町・坂上博章



愛息と共に鷲尾さん

するものを作ると、せっかくのウォーターフロントも、水に触れられず、ガラス越しに付き合わねばならなくなるのでは、と心配になる。

歌を唄う〝しあわせ〟

山本　愛
〈ボーカリスト〉

「好きな歌をお仕事に出来るって、しあわせですね。」初対面で私に話しかけて下さるきっかけに、何度か言われた言葉です。

私はいつも直ぐに、「はい、そう思います。」と答えています。

唄う事を、今までのように鑑賞するだけのもの、与えられて聴くというのでなく、自分が参加してみるもので、一寸の照れくささを乗り越え、緊張する快適さを感じる事に積極的になって、また実際にとても上手くなってこられました。

本当に、こんなにプロとの距離の縮まった仕事も、あまり他に見当たらない筈です。

私は唄いながら、自分の心の内面が突然目の前に飛び出してきて戸惑い、胸がつまったり、唄い終ったあとも、そのままの姿を引きずっていて、まるで歌のつづきみたいな不思議な感じを経験します。

歌の中に登場してくる女性にも男性にもとても興味があります。そして、一曲の歌の中に、人間としての運命を唄いかけます。聴いている人から見ると、なんともしんどいと思われることが私の歌に対しての真剣な姿勢だと思っているし、皆さまに言われたそのとおりの、私のしあわせなのです。

私が開いている歌の教室では、未踏の地のような生徒さん達がいて、まったく別の感動の源です。何もかも世間を知り尽くしていて、自分の意志をはっきり持っている立派なおとなの教室です。

学ぼうとする心、カッと見ひらいた瞳がだんだん輝き、紅潮していく頬や首・耳から、すごいパワーを発散する素晴らしい歌を、いま一緒に感じているなんて、何てステキではありませんか。

最近、六甲アイランドでは初めての、チャリティーコンサートを幼稚園から小・中・高までの学校の子供達を中心に行ないました。

大好きな神戸で、大好きな歌を

何の世界でも、一番小さくて一番たいせつな〝子供〟たち。この子供たちの前で、私は再度思いました。「私って、子供が大好き。」この不思議なエネルギーは、まるで宇宙的、神の存在だと信じています。私のこころに、また熱く燃えてくるものがあります。私が神経質すぎるとさえ思われる歌への思いが、違う形で今度は少し大胆に〝しあわせ〟を感じとることが出来ました。

求めれば、苦もなく何でも簡単に手に入る現在、どうにもならない難かしいものがあるとするなら、私は心と答えるでしょう。

その心を、私は歌で表現する努力をしないと話になりません。そうでないと、心はどんどん遠ざかってゆき、みなさまに私のことばの真実味や愛情を感じさせない、冷血な、ただの無意味な言葉の羅列としか思わせない、情けない結果が待っていると思われます。

どうぞ、すぐ傍にあるこの〝ことば〟に、やさしい愛を着せてください。大きな声で唄えなかった人でも歌を心で表現する努力をした時、一生懸命の内に、私の思っている〝しあわせ〟がきっとわかってもらえるでしょう。私の魂は歌と共にみなさまに聞こえ、また私の心へ帰ってくると思っていま

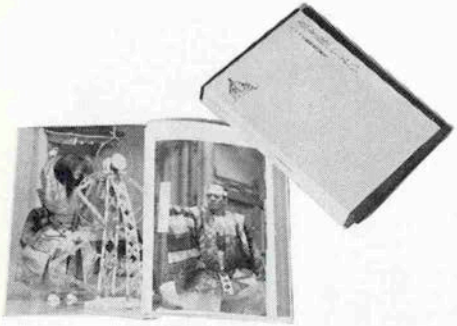
す。神戸ほど住み馴れた場所に、人々が惚れこんでいる都市も少ないですね。きのう見た夕焼けの山の一シーンや、終ってしまっても皆のお祭の労いを、いつまでも温かく語り合えるところ。いま私はこの神戸をまたもう一度、愛し直しています。

神戸の能楽師

点を線にしたい—私本・上田照也の歳月—の発刊

上田　英子
〈上田能楽堂〉

故人の七回忌に当たり、彼が志して果せなかった、心を残したであろう——と思う中に、神戸のいや関西の能楽史があります。これを皆さまのご協力で四月末に上梓何かとかかわりを持たせて頂いた方がたにお届けできたことは、伴侶という縁を持った私のできる、一番の供養かと思っています。



上田照也さんの遺志をついで

コレクションに加えることのできない片道切符を持って単身赴任をしてしまった一能楽師を、一般市民の人達にも能楽を知って欲しいと願った能楽師・上田照也を、今一度想い出し心にとどめて頂けるなら、これも又、能楽普及の一端になるのではないかしらと思うのは、私の自己満足でしょうか。

自分の国の自分達が六百余年の今では、古典といわれる迄に時を重ねて作り上げ伝えて来た舞台芸術を広く日本人に、外国迄へもひろめる。長い長い歴史の中の一点でしかない自分をどの様に——

〝点を線に繋いで継承したい。させたい〟の一念で仕事を続けた彼の足跡を軸として、神戸（関西）の能楽の移り変わりを資料にまとめてあります。

この—上田照也の歳月—が関西の能楽史研究をされる上に少しでもお役にたつならば、この本を作った者たちにとって、こんなに嬉しいことはありません。

次に本の目次を写し、紹介にかえさせて頂きます。

上田照也君を偲ぶ　観世　左近
序に代えて　畔柳　盈雄
第一章　種の時代
　海と坂のある街
　混迷から壮盛期へ
　能楽師にしておくには惜しい
　能舞台炎上　能楽師
第二章　ふたばの時代
　廃虚からの再建
　青春、ひたむきの日々
　新たな飛躍を求めて
　能楽の普及へ第一歩
第三章　華の時代
　子供たちとの舞
　招かれて、彼の国に舞う
　二万一千人の薪能
　一つの実り、一つの巣立ち
第四章　種をまく時代
　移り行く時代の中で
　栄光と挫折と
　未知の世界に挑む
　種をまき、種を育てて
あたたかき玉章
資料編
　上田照也演能記録
　隆一、照也・関係・企画能会番組
　上田照也関係系図
　所属団体・役職・受賞
　上田家同門の人々
近くて、遠いあなたへ　上田英子

平成二年二月十一日発行　非売品
企画　発起人代表　福王茂十郎
編集　畔柳盈雄／坂田昭二
発行　上田能楽堂内　上田英子
印刷　共栄印刷有限会社

地域文化論

〈その131〉

東京ステーションギャラリーを見て

辰野金吾先生と煉瓦壁を思う

嶋田　勝次〈神戸大学建築学科教授〉

東京などへ出張して少しでも時間があれば足を伸ばして美術館などで静かなひとときを持つことが出来ればありがたいと思うのだが時間のない時は近くのブリヂストン美術館とか山種美術館とかが、充実したひとときを与えてくれるのでありがたいと思っている。

最近はもっと近くの東京駅丸の内側の赤煉瓦駅舎内に東京ステーションギャラリーが生まれた。開館の時には全国の風景画が展示され、瀟洒な感覚を味わうことが出来たが、今回はオープン二周年を記念した展覧会となっている。「パリの終着駅――一九世紀の駅にみる美術と建築」をテーマとして図面から透視図、模型、油絵などによる多彩な展示となっていた。中でも現在オルセー美術館となっている往時のヴィヴァン駅の様子などを含めてそれぞれのパリの終着駅の有様を再現してくれた。

この東京駅は工期六年半をかけて大正三年に竣工した日本の鉄道の駅の顔であり、首都東京のシンボルでもあった。

先年この駅舎の取壊しか保存かの議論が市民運動にまで高まり、それが国会質問を起すこととなり前々総理自身も討議の中で答えていたことが思い出されて来る。

当駅の設計は旧帝国大学工科大学長（現東京大学工学部長）までつとめた辰野金吾先生であった。日本近代建築を築いた父でもあり建築界の大ボスでもあった。

辰野は建築家として、日本銀行とこの東京駅と国会議事堂の三つには関わりたいともらしていたようだ。国会議事堂だけは病身となって果さなかったが、東京駅は張り切っておられたようであり、その設計当時が五十才の油の乗り切った年だったといわれている。

神戸ではこの大ボスがタッチされたのは旧大林組神戸支店の建築が残っているだけだが、大阪では日銀大阪支店の建物が大阪市役所の西側に現存しているし、京都では京都府立文化博物館の一部として利用されている。福岡や盛岡などでも都市の歴史文化景観を支えるものとなっている。

東京駅の宮城前広場に面した中央部には皇室用玄関がある。その直ぐ横にこのギャラリーの出入口がつつましく控えている。ここから入って高い階段を昇った二階がギャラリーになっていて三室に分割されている。その壁面の煉瓦がそのまま積んである様子が分って面白いし絵などが架けてあると、何故かうまく引き立つような感じがして来る。このところ明治大正時代の建築を見直す動きの中で、石や煉瓦の実在感へのあこがれにも似た精神がどこかにあるような気がしてならない。当初の建築の姿を定着させている中に原風景の確認という意味をもつのかもしれないが、我々はものを残しているところに中からの具体的確認があるのではないかとも思う。

このギャラリーの階段を昇ったところに小さな喫茶室がある。部屋の中の四周が煉瓦壁のままになっていて、その喫茶室の名前が〝カフェ・ザ・ブリック〟とあった。イギリス積みの煉瓦ひとつずつから語りかけられそうな予感はある。

東京ステーションギャラリー

ESSAY

私の
北野界隈物語
3

北野の小径（こみち）

文・写真
林田重五郎
〈元・新聞記者〉

北野町は小径のおもむきも格別である。北野の小道が美しいといった意味の文章を、数年前に見た気がするが、全く同感である。

30年ほど前から北野町へチョクチョク出かけたが、最初はハンター邸など有名な異人館を仰いで写真にとるのが主な目的であった。もちろん今も、見物人がたくさん訪ねている主要異人館の美しさ、表通りの両側に並ぶ料理屋さんやブティックの活気の良さには、まず引きつけられているが、大通りをそっと結ぶ小径の味は実に深い。

写真A　昭和46年12月9日撮影。不動坂の上方から西へ向かう小径。

それは昭和46年12月9日だった。タクシーで、今の名前でいうと不動坂を上った。下車して、うろこの家の少し南の方へ出ようと、足を小径に踏み入れた。そして目を見開いた。小径はセメントのゆるい階段が西に向かっているが、落ち葉が積もってたまらない色。両側の洋館の塀の感じの深さ。北野の小径に初めて目が開けたのである。

それまでに撮った写真を改めて見直すと、偶然小径も写していて、改めてその良さにビックリする。それ以後小径をねらってカメラを動かすことが多くなった。

目を開けてもらった小径の姿が**写真A**である。

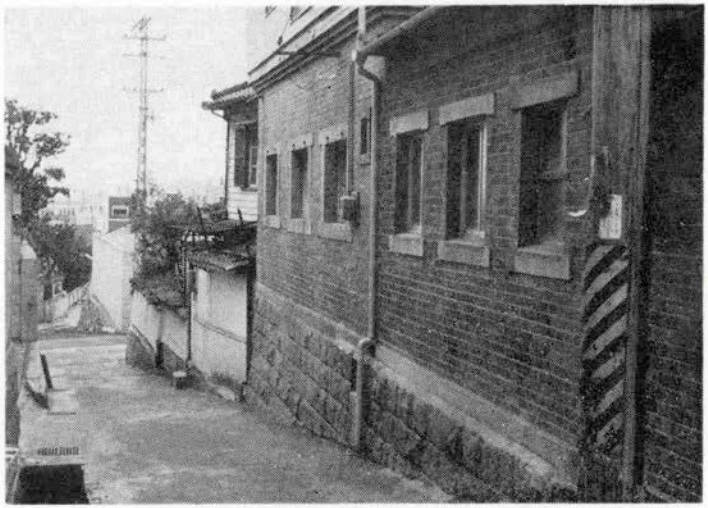
写真B　昭和36年撮影。トンガリ木べいの小径。

トンガリべい

昭和36年に撮影したと思われるネガの中にあったのが**写真B**である。風見鶏の館の西方の、萌黄の館の周辺の風景であったと思われる。

上部が三角になったトンガリ木べいの美しさ、トンガリの角度は鋭くないが、それだけ一層心にしみる。コンクリート舗装でなく地面のままの小径のあたたかさ。

レンガ建の横の小径



写真C　赤レンガの建物の小径。昭和44年1月か2月撮影。

これは昭和44年1月か2月に写したネガにある。レンガの色がなんとも親しみ深いので大喜びで小径のシャッターを切った思い出がある。北からへ南向って写したのだが、場所をどうしても思い出せない残念さ。今でもこの姿は見られるのではなかろうか。

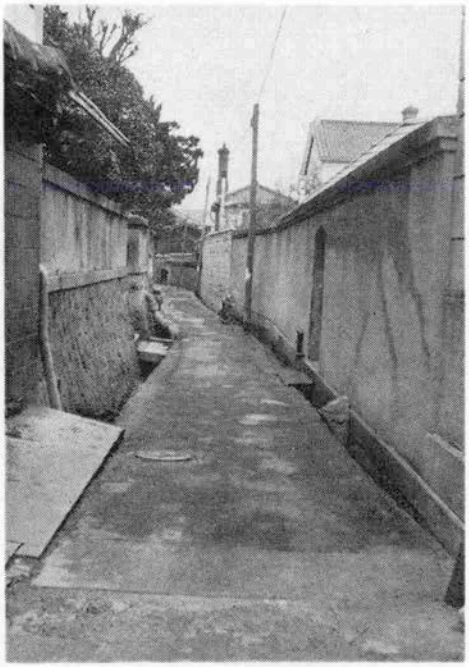
代表的な小径

ネガでそのとなりにあるのが**写真D**である。東西の方角に近い小径で、左側が山手であろう。

右側のセメントべいの長大さと雨水の模様が面白い。そして人影が全く見えない。いま多くの人たちを迎え、ワーンと鳴っているような北野町のにぎわいと比べると、夢のようである。

ここも場所を忘れてしまって残念。

シュエケ邸の西側

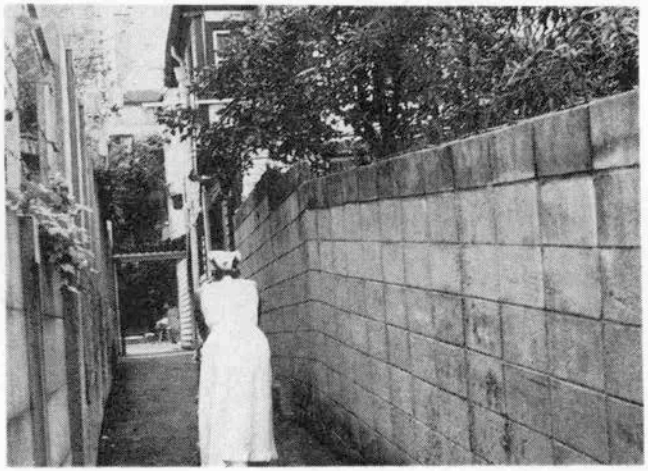


写真D　昭和44年1月か2月に撮影。

異人館通りの西の方の南側に、門兆鴻氏邸と西隣にシュエケ邸がある。そのすぐ西側の小径が実によい。

写真Eがそれ。昭和52年8月には看護婦さんが前の方を北上中という図柄がとれた。逆に南へゆくと、突き当たって、右折してトアロードに出るとすぐ東天閣、逆に左折するとおそらく北野町で最も味の深い小径がある。

北側の洋館もいまきれいに改装されている。ここの風景は最高級であろう。



写真E　昭和52年8月撮影。異人館通の西方・南側のシュエケ邸すぐ西側の小径。南から北に向って写す。

■エッセイ
私と神戸 4

神戸の伝統と格式

木村治美
〈エッセイスト〉
絵／灘本唯人

去年、神戸からお誘いがあった。ファッション・タウンで「グルメ・プロムナード」という企画があるから、参加してほしいといわれる。

私がなんとなく気遅れを感じる町が、日本にいくつかある。伝統のある町だ。そういう町や、そこに住んでいる人には、いわゆる格式や自信のようなものがあって、これはかなわないと感じさせる。この豊かな時代に、お金で買えないものといえば、時の流れだけなのだから。

イギリスには、とくにそういう町が多くて、私の旅心を誘う。こわいもの見たさといった気持だろうか。日本でいえば、筆頭は金沢、それから松江とか萩とか。神戸も私にとってはそういう町の一つだった。

その神戸からの招待である。ぜひ伺いたい気持が半分、遠慮したい気持が半分。美味なることで有名ないくつかのお店が、それぞれにディナ・パーティを催す。そのどれかに加わって一緒にお食事を、という趣旨であった。それだけならまだしも、最初に十分ほどの卓話を、ということである。

私がもっとも苦手とする展開になりそうな気配であった。せっかくの美食がのどを通らないのではないか。しかも格式と自信にあふれた神戸の人たちを真近にしてである。

でもやっぱり私の好奇心が勝った。自分のこわいもの見たさの気持に負けて、参加させていただくことになった。

ポートアイランドには何度かいったことがある。六甲の山の上のホテルにも泊った。六甲の裏側ものぞかせてもらった。娘と一緒に若い人たちに混じって、異人館めぐりもした思い出がある。けれども地元の人たちとじっくり話をしたことはなかった。もちろん講演会やテレビ座談会に出していただく機会は何度かあったけれど、それは地元の人と接したとはいいがたかった。

「グルメ・プロムナード」では、おいしい中華料理をいただきながら、あるいはそのあとのティ・タイムで直接話をきかせていただけた。地方都市に共通する現象だけれど、親の事業を受け継いで、地元でがんばっている方に、じつにさえた人材が

北海道の炭坑が、廃坑とともに町をさびれさせた。そこの青年会議所の人たちと話をしたことがあったが、文化講演会を開いたり、山の斜面一面に花を咲かせる計画をしたり、地場産業の振興をはかったり、過疎をくいとめるために一生懸命だった。町おこしへのその姿勢はいたましくさえあった。

神戸はそのような淋しい町ではもちろんない。新幹線もとまるし、観光都市として充分すぎる魅力をそなえている。ポートピアやら、ファッション・タウンやら、それこそ異人館やら、着実に発展の態勢がととのいつつある。それでもなお、わが町に危機感を抱き、問題意識をもっている人たちが、私には奇異にみえ、たいへん不思議でもあった。だからこそ発展するのだろうかと思いもした。

伝統ある町のもう一つの特徴は、女性たちがしっとりとして魅力的なことだ。神戸も例外でなかった。私のテーブルに、姉妹が席に着いていた。勤めをしているお姉さんが妹さんに、このパーティへの参加をおごったらしいのである。妹さんのにこにこ、にこにこしていた顔が、目に焼きついている。通り過ぎるだけの観光旅行では見えない人間がみえて、私はうれしかった。着席の会食会だったので、限られた人びととしか話ができなかったことだけが、残念であった。

多いような気がする。理由はかんたん、普通の就職をするなら、なにも地元にこだわる事情はない。大企業を指向するなら、どうしても東京ということになってしまうだろう。

しかし、親の仕事を継ぐひとはそうはいかない。どうしても、そこでがん張らなくてはならない。

〈筆者紹介〉
昭和7年東京生。東京教育大学英米文学科卒。同大学院文学研究科博士課程修了。現在、共立女子大学教授。「黄昏のロンドンから」で第8回大宅壮一ノンフィクション賞受賞。著書に「静かに流れよテムズ川」「主婦の天気図」ほか、訳書に「シンデレラ・コンプレックス」などがある。

□トランペット片手にブラジル一人歩き〈26〉

"Jazz"という テーマの個展

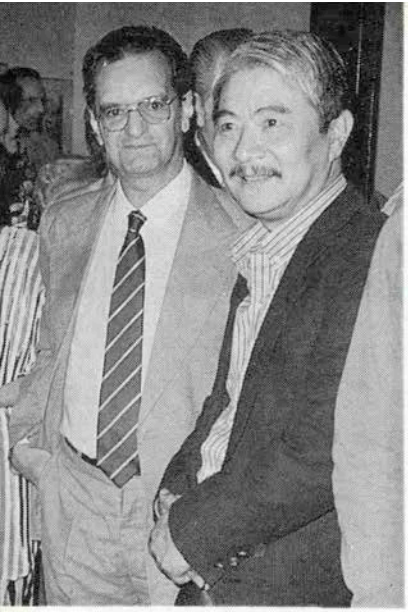
絵と文 右近 雅夫〈在ブラジル・サンパウロ〉

ウイーク・デイは仕事、ウイーク・エンドには演奏というわけで日曜画家の僕だが、アミゴの似顔絵やジャズ演奏のシーン、夜のカフェ等をパステルで描いた作品がたくさん集ったので去る九月三十日、僕らの結婚十五周年を記念して"Jazz"というテーマで個展を開いた。会場はもちろん僕らがいつも出演している"OPUS 2004"のサロンだが、ウイスキー"Chivas"のメーカーとして知られているシグラン社のラテン・アメリカ全域の社長になったトロンボーン奏者のフエルナンドが、「旅に出るので個展に行けないから……」と言って般入の前日家にやって来て一人で八点も買ってくれた。"Vernissage"にはシグラン社がコクテルを提供してくれ、オプスの女主人デーズィの手配でCanal 2 Canal 5の2チャネルのTVが取材に来た。オープンの九時前になると、もう招待者が続々とやって来た。家内の同僚や親戚に続いて、長い間会わないポルトゲースのセルジオとベアトリス夫人が来たので、僕らはお互いに抱擁し合い健全を喜びあった。僕がまだ独身時代によく遊びに行った女子学生寮で知り合ったレジナがウルガイ人の主人を伴ってやって来たが、すごくおばあさんになってしまったものだ。三十年前彼女のボーイフレンドだったアメリカ人のアルツールがやって来た。あの当時、彼は北米資本の製缶工場の社長としてブラジルへやって来たのだが、今はサンパウロのアメリカ領事になっている。彼と初めて知り合った時からどうもただの民間人ではないと感じた僕の勘が当ったような気がした。ジャズ評論家のジャーナリスト、アルマンド・ルイスと前後してアパートの隣人達がやって来た。ビール樽のようなお腹をしたフレディが夫人のセシリアと現れると居合せた人々が、「やあ！あの水夫のモデルが……まるっきりそっくりだ」と言って彼を冷やかした。僕の住むビルの六階のドイツ人、フレディに彼の肖像を頼まれたが、見上げるような大男なのでチューバを持たせ、はげを隠すため船員の帽子をかぶらせ、白地にブルーの横しまのシャツを着せたのが大変ユーモラスに出来上り、彼はドイツの父親に見せたいといって

喜んだ。僕は医者のドットール・ブレノからも肖像の注文を受けたが、彼はサックスが好きだというので手にテナー・サックスを持たせたように描いたので、知らない人はてっきり彼をミュージシャンだと思ったことだろう。

マルシャンの仕事をしているマリア・ルシアがバラの花束（ブーケー）を持って来てくれた。しばらく会わなかったが相変らずシックで美しい。家内と同じくサンパウロの近郊、アチバイアの出身で僕が家内と知り合った当時、僕のアミゴだったセルジオと恋仲になったが失恋し、あれから二十数年後、僕の個展でめぐり逢うことになったのも皮肉な運命だ。妹の峰子が母を連れて来てくれ、続いて弟夫婦もやって来た。今年七十八才になった母はすこぶる元気で僕のヴェルニサージが盛会でとても満足そうだ。日本で故田村考之介画伯について油絵を習った母は僕にとっていつも良い批評家である。

僕と家内が次から次へとやって来る招待者やアミゴ達の応待に追われていると、女主人のデーズイがやって来て、「もう数枚売れたけれど、開場一番に売れたのはあの Bix（ビックス）の絵よ……」と言った。それは黒地のファブリアーノ（バイダーベック）の紙に白いパステルで描いた Bix（ビックス） Beiderbecke（バイダーベック） の肖像だった。



個展会場での右近さん（右）

彼は僕が生まれた一九三一年に亡くなった伝説のトランペッターで彼の一生は小説になり映画化もされたが、あまり明瞭な写真がなく製作に一番苦労した絵だった。黒白だけで描いたのは「神秘性」を持たせるためだが、「日本へ持って帰るんだ」と言ってこの絵を買ってくれた人は日本から派遣されて来た「ホンダ」のデザイナーの方で僕にとってはこの上もない光栄だった。絵のビデオ撮影が終わり T, V. Globo（テーヴェーグローボ） のカメラマンがバンド演奏を撮りたいと言ったので僕は楽器を持ってステージに上った。ニュースの時間に流すので一曲だけでいいというのでドラムの前奏（イントロ）で急テンポの "Sweet Georgia Brown" をワンコーラスだけ演奏した。

ヴェルニサージは一応十一時に終わりそれからいよいよバンド演奏が始まるので入場者は有料ということになるが、ほとんどの招待客は帰らずに僕らの演奏を聞くため、ステージの前の席（メーザ）に坐った。ふと気がつくとフレディ夫妻とブレノ夫婦が同じ席に坐って愉快そうに話し合っている。ブレノ医師のオメオパチア療法を信じないフレディは夫人が彼の診療所に通うのを嫌っていたがブレノ先生がドイツ語を話すのでフレディはすっかり気をよくしアミゴになってしまったらしい。彼らの隣りの席には僕らの隣のアパートに住むフランシスコとラミーラ夫婦が坐って演奏を聞いていたが同じビルに住みながらフレディとは犬猿の仲である。翌朝エレベーターでフランシスコと顔を会わすと、「マサオ、あんなに楽しい夜はなかったよ！」と僕の肩を叩いて言った。

●珈琲のみながら……

神戸に音楽祭を…

スペイン在住、世界中で
演奏活動を続けるギタリスト

鈴木　一郎
さんにきく

神戸出身でスペイン在住のギタリスト、鈴木一郎さんは世界中を疾風のように演奏旅行で駆けまわる。

ジャズピアニストの山下洋輔さんとのジョイントコンサート（6月2日(土)／ポートピアホテル・偕楽の間）のために久しぶりに神戸へ帰ってきた鈴木さん、様々な国で行う演奏会の魅力を中心に、音楽に対する情熱を語っていただいた。

★世界中を飛んで演奏旅行の毎日

――スペインでの生活は何年目になりますか

兵庫高校を卒業してすぐにスペインへ行ったから、かれこれ、20年近くになりますね。バルセロナに家があるんですが、パリにも家を持っているんです。でも、ここはほとんど空家同然（笑）、あまり帰ってません。僕は特に学校で教えるとかしてないので、演奏活動が唯一の生活のもと。だから、とにかく舞台に立たなくちゃいけない。今日だって、おとといまでキューバで演奏して、こっちへ着いたばかり。明日、朝一番の飛行機でパリへ、それからバルセロナへ行くんです。毎月、3分の2は旅行してますね。

――ずいぶんいろいろな経験をされたんでは…

合計すると100カ国ぐらい行きました。とりたてて、びっくりするようなことはないけど、それぞれの国の表情があって面白いですよ。街並みひとつにしても、イタリアは黄色や褐色、パリは日本の〝わび・さび〟に通じるような灰色、スペインは緑色の窓と白色の壁と、お国柄が現れる。

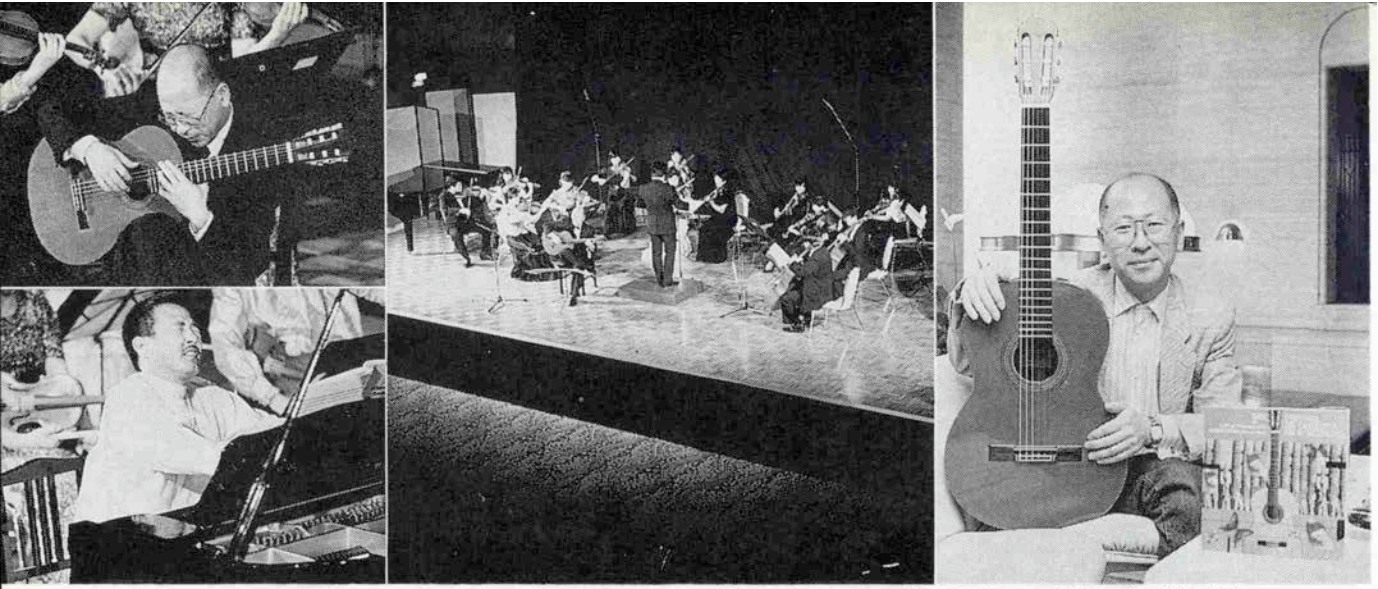
それに、この前友人と話したことなんですが国の匂いってあるんですよ。雰囲気とかそういった抽象的なものがなく、匂い。ソビエトの匂い、北欧の匂い、その国の生活からの匂いかなあ、旅行ばかりしている人間にしか感じない、いや匂わないことなんだろうけどね（笑）。

そうだ、おとといまでいたキューバで嬉しいことがあったんですよ。キューバには音楽祭に出演するために行ったわけですが、その開催日が僕の誕生日、なんと誕生パーティーでみんなが僕のお祝いをしてから音楽祭の幕が開いたんです。（笑）これは最高だった。

★18年待ったギター

――素敵な経験をされているのですね

思い出はいっぱい溢れるほどあります。たとえば今夜、僕が使うギター。オーダーしてどれくらいで作られると



▲バルセロナの音楽祭のプログラムを前に。尚、表紙は本誌でもおなじみの画家・石阪春生さんによるもの（右）。迫力あるジャズピアノ・山下洋輔さんとのコンサート風景（中、左）。

思いますか。

――5、6年ですか

18年。18年ですよ。僕は一本のギターを手に入れるために18年待ったんです。全部、手作りですからね。このギターもそうです。模様、見て下さい。細かいモザイクのひとつ、ひとつを丁寧に作っているでしょう。外国の人は、実に心をこめて作りますから、素材から大変なこだわりようなんです。

有名なものにカナダ杉がありますが、南斜面で育ったものは使わないんです。北側のものしかだめ。なぜかというと成長がおそい杉は木目がつまって、いい音のでるギターになるんです。ほら、肉の霜ふりのような横しまが入っているでしょう（ギターを指さす）、これが素晴しいんです。

僕は、触っただけで、どんな音がでるか、わかるんですから（笑）。

★神戸に乱入する日が来るように

――ところで、鈴木さんの演奏活動は外国が中心で、日本、特に神戸のファンはいつも心待ちにしているのですが、これからも外国を拠点にしていかれるのですか。

僕はね、世界中で神戸が一番好きなんです。いつかは帰ってきて住みたいと思ってます。外国で学んだことを神戸で発表したい。

そして、これは将来のことですけど音楽祭をぜひとも、開きたいんです。能や美術、映画、音楽が一緒になった芸術祭はあるけれど音楽祭はないでしょう。音楽だけに絞り込んだ内容の濃いものにしたいんです。〝六甲音楽祭〟なんてネーミングでどうかなあ（笑）、山下洋輔に言わせれば、〝神戸に乱入〟する日がくるように、がんばります。

西村有紀

（ポートピアホテル・ベルクールにて）

経済ポケット ジャーナル

★住宅の国際見本市、神戸インターホーム'90開催

海外、国内合わせて百七十八社が出展、国内初の本格的住宅関連国際見本市「神戸インターナショナルホームフェア'90」が国際展示場をはじめとして、神戸ポートアイランド内三会場で開催された。

同フェアは、わが国において高級化、多様化する住宅ニーズの高まりに応え、国際的な住まいに関する情報の提供と商取り引きの促進、住文化の向上を図るのが目的で開かれ、展示会のほか、輸入住宅や海外資材の具体的な活用事例を示すデモンストレーションハウスなどを現地見学するハウジングツアーの実施、住まいについて考えるセミナーやシンポジウムなど多彩な企画で構成された。

現在、米包括通商法301条の対日適用品目として木材製品があげられ、輸入木材や製品の輸入促進がわが国での重要課題となっているだけに、関係各方面から高い関心が集まった。

★㈱神栄社長に佐塚達男氏

神栄株式会社（本社・神戸）は、中本栄市社長が監査役に退き、佐塚達男常務が社長に昇格するトップ人事を五月二十八日の取締役会で正式決定した。

中本氏は六十三年一月から社長職を務め、社内の機構改革に腕を振るってきたが、基礎づくりが出来たことで、佐塚氏にバトンタッチすることになった。

新社長の佐塚氏は、昭和二十五年の入社以来、同社の主力である貿易部門のほか、電子部品、管理部門を担当、社業全般に通じている。

佐塚　達男氏

佐塚達男氏（さづか・たつお）昭和25年横浜経済専門学校（現横浜国立大学）卒。同年新栄入社。52年取締役。60年より常務。60歳。

★本高砂屋の新本社が六甲アイランドに移転

和・洋菓子メーカーの本高砂屋（本社神戸、杉田政二社長）が、神戸・六甲アイランド内に本社を移転する。

新本社は七階建ての事務所棟（延床面積約二千七百平方㍍）と、四階建ての工場棟（同約七千平方㍍）で構成され、土地代を含めた総投資額は約二十二億円。

今回の移転は、現在まで神戸市内の五カ所に分散していた物流拠点を集約させると同時に、管理部門・営業部門も移し、経営の効率化を図っていくのが最大の狙い。八月完成予定。

★ジャヴァの物流拠点、流通センター完成

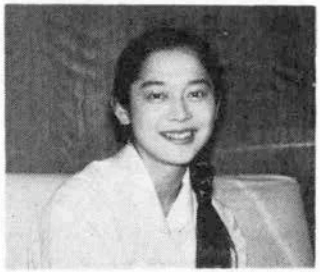
大手アパレルのジャヴァグループが一昨年秋から西神流通団地（神戸市須磨区）に物流システムの拠点として建設していた「流通センタービル」が完成した。

敷地面積は約一万八百平方㍍で、地上5階建て、延床面積約二万五千平方㍍。総工費は土地代を含めて約四十億円。

同センター設立は、これまで外部業者らに委託していた商品の入荷、発送などの作業を一カ所に集約することによって、業務の効率化を図るのが目的。管理、運営には「ジャヴァ・ユニックス」があたる。

★KOBEオフィスレディ★　浦井　久加さん（23）

〈上島珈琲株式会社 バザール部勤務〉



大きな瞳とロングヘアが華やかなイメージを与える浦井久加さん。小売店を回ってコーヒー豆をセールスする仕事も2年目に入り、「人と会うのが好きなので毎日が楽しいです」とほほえむ。

関学では英文科卒というより「チアリーダー部卒」と言えるほど打ちこんだ。「チアの4年間の想い出は私の財産であり、誇りです」と胸をはる。細やかな心くばりの出来る、魅力的な女性である。

垂水区在住　さそり座のB型

★経済サロン　(1)

創業100周年を迎えて さらなる発展を期す

小泉　徳一　さん

小泉製麻株式会社取締役会長

今月号より経済界のトップ経営者の方々に毎回登場して頂き、お話を伺う「経済サロン」のコーナーを設けました。その第1回として、小泉製麻の小泉徳一会長を本社にお訪ねしました。

★今年で創業100年を迎える

小泉製麻は、明治23年6月に我が国最初の黄麻紡績会社として創業しました。ですから今年が丁度創業100周年に当たりまして、6月7日に記念パーティを催しました。

麻は値段が安く、通気性がいいんです。スタートは米の輸出用麻袋だったらしいんですが、まあ先見の明があったと思いますよ(笑)。神戸は原料の輸入にも便利ですし、この本社の建物も評判がいいようですしね。工場や倉庫の壁は何でも香港からわざわざ輸入したレンガだそうです。

黄麻業界というのは、仲々急速には大きくなれないんですが、つぶしが効く分野ですので、徐々にでも伸ばしたいですね。

★外部の声を聞きニーズに対応

現在は麻だけではなく、新素材メカトロニクス、コンピュータ、サービス等の分野にも進出しており、時代のニーズにこれからも対応していきたいと思います。お客さんの要望に応じるために、新製品の開発は常に心掛けなければならないでしょう。そのためには外部との協力が不可欠ですので、いろいろな立場の人からの意見をお聞きしたいですね。どうしても会社内だけでの内弁慶では、取り残されてしまいますよ。今のところコンピュータ部門が好調なんですが、先を見越した方針を打ち出して、行動に移らないといけませんね。

★創意工夫の精神で前進

私の実家は滋賀出身だったんですが、私自身は神戸っ子です。趣味といえば、月並みですがゴルフですね。ハンデは20ですので年齢からすれば、やや上といったところでしょうか(笑)。それとお酒は好きですね。地元灘五郷ということもあって日本酒には目がありません。これからの季節はビールも楽しみで仕事がはかどります(笑)。実は本社屋に飲食店を出す予定もあるんですよ。只今テナント募集中です(笑)。

見えない部分で頑張るのが我が社の社風です。各自が創意工夫を重ねて、2世紀目に入ってさらに前進したいと考えています。(談)